

「チャペルの思い出」

飯 謙 (いいけん) (1977年社福卒)

チャペルに最初に足を踏み入れたのは高校入学直前のことだ。まだ大学「闘争」終結前のとげとげしい空気の流れる白金の丘で、何やらホッとする空間にめぐり逢えた思いがしていた。高校時代は礼拝とは別に昼休みの「静思の時間」(パイプオルガンが曲目の紹介もなく奏でられるひととき)も楽しみに、チャペルに出かけていた。

卒業後、初めてキャンパスを訪れた際も、チャペルに入れるようにと、礼拝の時間に合わせて校門からの坂道を上ったことを思い出す。天井を見上げると、むき出しになった、力強い木材の組み合わせ——。チャペルを、何やら傑出した英雄的な一本の大黒柱がではなく、太いもの、細いものが入り交じり、おかしな自己主張もない多くの木材が、無心に互いを支え合っているという形状は、母校が語るキリスト教的な人間観を暗示していると感じる。日常生活の中に、そのように献身的に働く隣人を発見せよというメッセージ、また、われわれ自身も、たとえ非力であっても、そのような\\\\"Do for others\\\\"の働きに参加できるというエールが聞こえてくるようだ。

ヴォーリズは、よくそれを汲み取り、目に見えるかたちにしてくれたものだと感謝を覚える。

わたしは導かれて、いま、ヴォーリズの設計による建物の中に働き場を与えられている。白金の丘を巣立って40年を迎える。改めてチャペルが語る建学の祈りを心に刻みたい。